まんだら通信

第 199 号（通巻 235 号）

平成 25 年 01 月　西暦 2013 年　佛暦 2579 年　皇紀 2673 年

安房国八十八ヶ所　第一番札所
295-0103　千葉県南房総市白浜町滝口 1084
真言宗智山派　天神山　紫雲寺　髙橋　龍渉
郵便振替　00120-2-43163　紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
http://www.shiunji.org/
Mail post@shiunji.org

昭和天皇 三十二の佳話

我が千葉県の偉人、伊能忠敬は家督を譲って隠居の身分になってから、天文学を学ぶため江戸に出て、我が子ほど歳の離れた学者の弟子になり、天文学・測量術を身に付けました。後に全国を歩いて測量し、現在の地図と較べて遜色のない正確な日本地図を作りました。白浜ではこの地区の福原家に泊まり、測量のための精巧なコンパス、彎窠羅針を遺しました。

その忠敬の玄孫、外交評論家の加瀬英明さんは、戦中戦後の日本のために活躍した「最後の武士外交官」加瀬俊一さんのお子だけに、ともすれば自己中心になりがちな日本人に、このままでは世界に誇る日本がなくなってしまうと、大変心を痛めております。

そのお気持ちから、私たちの生き方のお手本といえる素顔の昭和天皇の、折りに触れての心温まる挿話を一冊にしました。

皇室二千六百年の歴史の中には、困難の時代を過ごされた天皇もおられたと思いますが、『激動の昭和』といわれるように外国の支配を受け、それまでの価値観が逆転するという未曾有の歴史の中にあって、最もご苦悩の大きかった元首ではなかったでしょうか。

前書きで、「日本にとって幕末から明治は、偉大な時代だった。

日本は十九世紀の後半に、白人が覇権を握る世界において明治維新を成し遂げて、西洋を学んで近代化することに成功し、たちまちのうちに一流国に伍することができた。

これはアジアの民の中で日本だけが行なえたことだった。このような偉業を成し遂げることができたのは、一人ひとりの日本人の質が高かっただけではない。庶民にいたるまで真面目で、我欲を抑え、公を重んじて、和を尊んだからである。つまり、社会の質が優れていたからだといえるだろう。」

と書いておられますが、「真面目で、我欲を抑え、公を重んじて、和を尊んだ」徳性を、少しも気負うことなく生涯を通じて、愚直に実行されたのが昭和天皇でした。迂闊なことに、今まで気付かなかったのですが、明治天皇の『五箇条の御誓文』には「上下、心を一にして」、『軍人勅諭』では「朕と一心になりて」、『教育勅語』では「朕、爾（なんじ）臣民と倶に…その徳を一にせん」と、必ず「私も国民も」と仰せになっています。

明治天皇を鑑としておいでだった昭和天皇も全く同じで、一九四六年元旦の、所謂『人間宣言』にも「朕ト爾等国民トノ間ノ紐帯ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ…」とあり、『五箇条の御誓文』を引用したあとに「叡旨公明正大、又何をか加えん」と仰せになっています。

その真意は、今どき流行りの「上から目線」などではなく、表現は武骨に見えますが国民への深い慈愛が滲んでいます。

このことはまた、歴代天皇の一貫した思想でもありました。

この、国民との揺るぎない信頼関係があったから、天皇の権威を貶めようというGHQの肝いりで戦後すぐに始まった『全国ご巡幸』も、「眼鏡をかけ、近眼で、猫背の小男を近くから見れば、国民の天皇に対する信仰も崩れるだろう。」という彼ら占領軍の期待とは裏腹に「県民が押し寄せ」「なだれをうつ」「万歳の嵐」「ちぎれるばかりに日の丸の小旗を振り」と各県が編纂した行幸記にあるように、全く逆の結果となりました。

人間宣言のお言葉通り「私と国民との信頼関係」は強くなることはあっても、些かも揺らぐことはありませんでした。

戦争に敗れたヨーロッパの王室は、亡命したり処刑されるのが当たり前でしたから、彼ら占領軍がそれを予想したのは無理もないことですが、目に見える姿形よりもその生き方に価値を置く日本人の考えを、彼らには理解出来なかったのです。

加瀬さんも「西洋人は個人であることを尊ぶために、無私や滅私の概念がないから、とうてい理解することができなかった。」と書いておられます。

仁徳天皇の『竈の煙』の挿話に象徴されるように、贅沢を厭い質素を重んじ、権力から超越した皇室のあり方が、神話に源を持つ、世界で一番長い歴史を刻む結果となったといえるでしょう。

新書版二〇〇ページほどのコンパクトな本ですが、どこから読んでも得をした気分になれるこの一冊。本屋さんに頼むのもチョット億劫というあなたのために、こちらでご用意します。ご連絡下さい。

余滴

▼　明けましておめでとうございます。日の丸が映える青空、というわけには行きませんでしたが、波穏やかにまあまあの年明けでした。

▼除夜の鐘つきは 11 時 45 分ごろからでしたが、初護摩は真夜中 12 時を回ってすぐに焚き始めました。静かなお堂の中に、赤々と力強く燃え上がる炎とお経の声に、いやがうえにも今年は良いことがあるような気持ちになります。

人間は『気』が何より大事ということから考えても、お参りをサボるのは勿体ないことです。

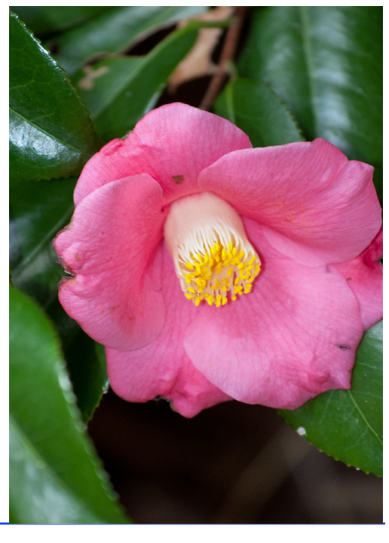
▼長福寺（砂の寺）の本尊様が、先月修復を終え見事なお身体になってお帰りになりました。世話人さん達が中心になって、紅白のお餅を配ったりささやかながら、心の籠ったお祝いをしました。これで向う何百年かは痛々しい思いをせずに済みます。

▼お寺はいつも、今風に言えばオープンです。つまり365日、いつ何ん時でも話し相手がいるということです。

皆さんの方が、お寺を当てにしていないのか、遠慮があるのか分かりませんが、おいでになりません。スリランカのアンギーお坊さんのお寺など、応対に困るほど、お檀家や土地の人たちが相談に来ます。

取り敢ずはせめて月 1 日ぐらいは、というのが『オープンテンプル』で、今月は 20 日（日曜日）です。たまには無駄話もいいかな…と思ったらおいで下さい。

▼ 12 月 10 日からの『冬報恩講』。私たちの宗派の元になった覚鑁上人のご命日で、智積院では毎年厳かな行事が続きます。ご恩に感謝して今年も孫弟子とお参りしてきましたが、92 歳にお成りの寺田能化様のお元気なこと。▼日ごとに日差しが弱くなり、日暮れも早くなるこの頃になると、密やかに咲きはじめるヤブツバキ。本当の意味でのヤブツバキは一重でしょうが、キズのないもの、姿のよいものをと探したらこの一輪になりました。　2013/01/08 龍渉



iMac 2.7GHz IntelCore i5（MacOS X 10.8.2 &10.6.8）・ WordProcessor egword Universal 2.0.2・printer Xerox DocuPrint C3350・Camera Nikon D5000

にっぽん人情小噺

三遊亭鳳豊（ほうほう）

第八十四話　じいちゃん

歌舞伎俳優の中村勘三郎丈がお亡くなりになりました。

私は、勘三郎丈とはかなり親しくさせていただきましてね、いろいろ教えていただきました。

先日も、テレビの時代劇を見ていましたら、「そなた」という言葉を出演者が連発しておりましたが、みんな「冬のソナタ」の「ソナタ」と同じアクセントでいうんですね。勘三郎さんは、いつも、それを私に注意してくださいましてね、「あれは、永田町の永田と同じアクセントで、ソナタと言うのが正しいんだ。いつから、音楽のソナタになったんだろう」って言ってました。

また、勘三郎さんはおじいちゃんになったばかりでしたからね、さあ、これから孫を育て、三代揃って舞台に出ることを、さぞ楽しみにしていたことだろうと思います。

今日は、あるおじいちゃんの子育ての話をしましょう。

昭和四九年、三重県員弁（いなべ）（現在のいなべ市）に、ひとりの赤ちゃんが誕生しました。

名前はタツヤ。劇画の主人公のようなカッコいい名前ですね。おじいちゃんは、この玉のような孫の誕生をなにより喜びました。

禍福はあざなえる縄の如し。家族全員がタツヤ君の誕生を喜んだ二ヶ月後、タツヤ君のお父さんが亡くなったのです。まだ、二十九歳。血液のガン、白血病でした。

「よし、タツヤはこの私が育てよう！」

父親が亡くなったのですから、祖父は、父親の代わりにタツヤ君を育てる決心をしました。もちろん、祖母も文句はありません。

祖父母の愛情に育まれ、タツヤ君はすくすくと成長し、小学校に入り、勉強に、遊びにと毎日楽しそうに学校に通っていました。その顔には、どこにも父のいない寂しさはありませんでした。祖父も、タツヤ君の屈託のない笑顔に、何度も「このまま素直に、まっすぐに成長してほしい」と心から願ったものでした。

しかし、曲がり道はどこにあるかわかりませんね。タツヤ君に変化が表れたのは、小学三年生の授業参観の時でした。授業中、振り返ると、おじいちゃんがいました。

しかし、タツヤ君はその時、はっきりと自分には父親がいないということに気づいたのです。

見れば、友だちのお父さんはみんな若い。「どうして、僕だけ……」。タツヤ君はその時、これ以上ない寂しさを味わったのです。

皆さん、この寂しさ、わかりますか？

私にはよくわかりますね。いじめにあって自殺する子は悔しくて自殺するのではありません。苦しくて自殺するのでもありません。悔しいとか苦しいと言えるうちは、人間は生きているのです。

みんな、寂しくて、死を選ぶのです。心が先に死ぬのです。誰もわかってくれないという、たとえようのない寂寥感。それがやがて、もう、どうなってもいいという気持ちになるのです。

タツヤ君の心にふと宿った「なぜ、僕だけお父さんがいないんだ」という寂しさは、次第に大きくなります。おじいちゃんは、授業参観に出席したにもかかわらず、そのことが理解できませんでした。「お父さんの代わりに行ってあげた」のだと信じていました。でも、タツヤ君には「お父さんの代わり」は存在しなかったのです。

この「なぜ、僕だけお父さんがいないんだ」という疑問から、「僕には、最初からお父さんがいないんだ」と思うようになるには、それほど時間がかかりませんでした。

タツヤ君は、中学生からタバコを吸い始めます。祖父が注意しても、「うるせえなあ、このじじい！」と言い放つ始末。おじいちゃんは、あわてます。しかし、行動はエスカレートします。ついには、タツヤ君は暴走族になってしまったのです。

おじいちゃんは、「中学を出たら、家を出て、働くよ！」と進学を嫌がるタツヤ君を、無理やり、全寮制の麗澤瑞浪高校という道徳教育を重んじる学校に入学させます。入学金や学費は、先祖代々の田畑を売ってこしらえました。

しかし、いくら道徳教育の名門高校でも、すさまじい寂寥感で覆われたタツヤ君の心が元に戻るわけはありません。タツヤ君は、寮内でも暴れ回り、高校二年生の時、とうとう十数人の後輩を殴打し、事件となったのです。タツヤ君は学校に呼び出されます。「保護者も来るように！」と言われたおじいちゃんが面会室にやってきます。そして、ドアを開けると、ものすごい眼差しで睨みながら、ゆっくりとタツヤ君に近づきます。椅子に座っていた先生たちも、殺人が目の前で行われてもおかしくない、あまりの迫力に思わず立ちあがりました。

（殴られる！）タツヤ君は覚悟を決め、構えました。その瞬間、おじいちゃんは、床に上下座をして、タツヤ君に謝ったのです。

「タツヤ、すまなかった。私がすべていけないんだ。お前をこんな子どもにしたのは、おじいちゃんのせいだ。お前は悪くない。全部、私がいけないんだ。許してくれ」

おじいちゃんの声は、ほとんど泣き声でした。その時、暴走族だった中学生の頃、オートバイに乗ってタツヤ君の家にみんなが集まると、夜中であろうと「みなさん、タツヤがお世話になっています。ありがとうな」と言って、暴走族の仲間たちにひとりひとりお茶とお菓子を出してくれたおばあちゃんの姿がタツヤ君の脳裏に浮かんだのです。

（ああ、俺は、親父はいないけど、ちゃんと愛されていたじゃないか）

タツヤ君の寂しさの霧が晴れた瞬間でした。タツヤ君は、おじいちゃんを起こすと、「おじいちゃん、ありがとう。俺が悪かったんだ」とおじいちゃんに謝り、先生には、こんな提案をしたそうです。

「先生、いまここでワルから足を洗います。そして、次の寮長に立候補します！」

川瀬達也さん。

いま、麗澤大学のキャリアセンターで学生たちの就職のために、採用してくれる会社を訪問し、日夜、明るく走りまわっています。おじいちゃん、ありがとう、と心の中で手を合わせながら。

今月も月刊誌ＭＯＫＵ（モク）と、著者鳳豊師匠のご好意による、心温まる『にっぽん人情小噺』をお届けいたします。今では表のページよりも、こちらをお待ちの人の方が多くなりました。

師匠は、ＭＯＫＵでは落語家のお名前ですが『聞き書き』という新しい取材と書きかたで、有名無名の人々のお話しを聞いて文章にする、という方法で日本全国を飛び歩いておられる方です。

iMac 2.7GHz IntelCore i5（MacOS X 10.8.2 &10.6.8）・ WordProcessor egword Universal 2.0.2・printer Xerox DocuPrint C3350・Camera Nikon D5000